



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 特集 : 食べることとケア   |
| Author(s)    |   |
| Citation     | 臨床哲学. 2002, 4, p. 3-4   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/11981">https://hdl.handle.net/11094/11981</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 特集：食べることとケア

昨年度（2001年度）臨床哲学研究室の通称「ケア班」分科会では、食事援助およびその中止というケアの場面を取り上げ、一年間にわたって議論した。発端は、年度始めに分科会で何をテーマに議論するかを決めるとき、メンバーの西川勝さん（臨床哲学研究室大学院生、老人保健施設勤務、看護師）が、幾つかの事例とともに提示された、次のような「問い」にさかのぼる。

痴呆老人が食べられなくなったとき（あるいは食べることが困難になったとき、食べることを身体的にか意図的に拒むとき）、周りの家族や介護・看護のスタッフは何に直面しているのか、何を考えればいいのか、どのようなケアやサポートが可能なのか、また不可能なのか。

この「問い」は、現在のケアの現場が抱えている諸問題を考える上で、基本的であると同時に非常に深い掘り込みを示している。

人がものを食べることは生命活動や生活の基本中の基本であり、それを援助することもケアの最も基本的な動作の一つである。だが食べることは決して単純な活動ではない。そしてそれが人の生命や生活習慣に深く関わっているがゆえに、ケアも単純ではない。人がものを「食べること」また「食べないこと」とは、どういうことなのか。それを援助するにはどうすればよいのか。食事援助は骨の折れる作業であり、多くの労力を必要とする。しかし、増え続ける高齢者（食事援助を必要とする人）を前に、看護や介護のスタッフにも限りがある中で、どのような細やかなケアができるのか。またそこには誤嚥などによる生命の危険が常に伴う。だからといって安易に人工的な栄養補給技術に頼り（つまり食事援助を中止し）、人が「口から食べる」機会を簡単に奪ってしまってよいものかどうか。ものが食べられなくなって生を細らせていく高齢者に対して、援助者はどう付き合っていけばいいのか。さらにそれが意思疎通困難な痴呆老人である場合、どうなのか。

議論は、痴呆老人に対する食事援助とその中止という限定された問題を超えて、食べる・食べないことの意味、生活上の食事と生物上の栄養補給との違い、食べる／食べさせることの区別、一般の医療機関と福祉施設（またホスピス）での考え方の違い、そうした機関・施設の家族との相談やスタッフ間の意思統一の問題、拒食や過食といった現象、食事の仕方、さらには生物進化上の摂食の意味などにまで広がった。分科会のメンバーは看護師、介護福祉士、福祉施設職員、法律家、哲学・倫理学者、サラリーマン、学生、留学生など様々な領域の人々を含み、常時10～20人の参加者で

活発な対話が行なわれた。そしてこの議論に触発されて、何人かのメンバーが「食べること」や「ケア」に関する考えを口頭発表し、それがまた議論を触発することになった。またこの議論を、臨床哲学研究室全体の演習で要約して発表し、分科会に参加していない人々からの意見も交えて議論した。

こうして一年間が過ぎようとしているとき、この議論を何らかのかたちで成果にしてみようという気運が分科会に起こった。もとより一年間の議論で明確な結論が出たわけでもないし、それを目指したわけでもない。しかしこの議論の中で、メンバーは「食べることとケア」に関する諸問題を共有し、そこから豊かな切り口をそれぞれに見い出していったことは確かである。その個々の成果を、この『臨床哲学』の場で一つの特集というかたちで発表させていただくことになった。執筆者は一年間の議論から様々な触発を受け、それぞれの観点から力作を書いている。それらは、この議論に参加して下さったその他の多くの人々とともに生み出された成果である。

2002年6月

堀江 剛